

明治維新と薩摩 「薩摩という国」より

― 陰の主役たちの物語 ―

崎元 雄厚（3組）



《はじめに》

玉竜の卒業と同時に薩摩を離れて半世紀が過ぎたが、薩摩人であることを誇りに思っている。誠実、明るい、てげが、嘘をつかない、足るを知る、性善説の信奉者などの薩摩人気質が、源日本人と日本文化の良いところを今に伝えていているように思える。

一 国平和主義という蝸壺生活で一人ぬくぬくと我が世を楽しんでいる日本。近隣諸国の恫喝に振り回され、馬鹿にされているのも分らない日本。明治時代の日本は貧しかったが、独立自尊、自助努力の精神に燃え、独り立ちできて外国からも尊敬されていたのに。日本固有の文化に誇りを持ち、かつての日本人がもっていた気概、自立心、自信を取り戻そう。

我々を育ててくれた薩摩の文化、風習、歴史を振り返って三十五項目に分け「薩摩という国」というタイトルで薩摩に関する話題をまとめた。以下はそのうちの一部である。

《焼酎「大警視」》

― 川路 利良 ―



鹿児島市の中心から約3km離れた鹿児島市皆与志町（旧伊敷村比志島）に「大警視」という名のバス停がある。「大警視」「川路大警視」「巡查殿」なる銘の芋焼酎が発売元の鹿児島県警本部で売られている。

マルセイユ発花のパリ行き汽車の窓から新聞紙に包んだ「黄金もの」を投げ捨てたところ、運悪く保線夫に命中し、翌日の新聞に書きたてられた

「チンプン」騒動を起した薩摩隼人がいた。「〇〇どんのキン」コ（金玉）」という逸話の主でもある。

一 兵卒から身を起し、日本の警察制度の制定という大偉業を果たし、警視總監まで上り詰めている。西南戦争では官軍の旅団長として、三千人の羅卒を率いて参戦したが、地元では「西郷どんの敵」として彼の親族が七人も殺され首を晒された者もいたという。その男の名は平成十一年（一九九九年）になって鹿児島県警本部前に銅像が建立された「川路利良」その人である。



川路は一八三四年、薩摩藩卒族（与力）の長男として伊敷村比志島で誕生し、四十六才のとき東京で肺結核により死亡した。志士でいえば福井藩の橋本佐内、長州藩の広沢真臣と同じ年の生まれである。

薩摩藩は極めて身分階級性に厳しく、卒族は城下士はおろか郷土（外城士）より身分が一段と低く、西郷や大久保ら四十数名の下級藩士で構成され、明治維新の推進母体となった「精忠組」に入会する資格さえなかった。本来なら佩刀も出来ないほどで、一生うだつの上がない惨めな生涯を送らざるを得ない境遇にあった。

この厳しい身分制度は、同じく低い身分に属していた伊藤博文、山県有朋の活躍でも分るよう比較的緩やかな長州藩のそれと対蹠的であった。

彼は、その最低に近い身分から強烈な向上心と自助努力で這い上がり、日本の警察制度の基礎を構築するという偉業をなし遂げた。陸軍少将の地位まで昇進し「才イが大名家・・・」と驚いた正五位の大名の位（従五位以上）まで授与されている。武勇伝を交えながら彼の経歴を眺めてみよう。

本稿を書くに当たって加来耕三著の「日本の警察の父川路大警視」を参考にした。

まずは「蛤ご門の変」（禁門の変ともいう）における武功からはじめよう。

長州は、七卿の都落ちで知られる「八・一八の変」で京都を追放された。その後、同藩内では、失地回復を目指す来島又兵衛を頭とする強硬派の意見に対し、久坂玄端、高杉晋作、木戸孝允達は京都への武力進出は時期尚早として出兵に反対した。しかし、来島に「議論より 実をおこなへ なまけ武士 国の大事を余所に見るばか」

とけしかけられ、久坂玄端は参戦を余儀なくされた。

観念論気質の長州勢は、君側の奸を討てと成否を度外視して御所を攻撃し始めた。彼等は蛤ご門等で御所を準備していた会津、桑名、薩摩の軍隊に撃退された。

戦死者は長州勢は二百六十二人、会津、桑名、薩摩側は九十七人であり、京都は三日間燃え続け、二万八千余戸が焼失した。この戦いで長州側は久坂玄端など優秀な人材が多数戦死した。これが世にいう「蛤ご門の変」である。

この戦いには後日談がある。当時、薩摩藩は公武合体を目指しており、極端な尊皇攘夷の考えはなく、朝廷に御所の守備を命ぜられていたので、御所に攻撃を仕掛け侵入してきた長州軍を撃退せざるを得なかったのである。しかし長州は裏切られたとして、同藩は「薩賊会奸」と薩摩藩を激しく敵視した。この対立は二年後「薩長同盟」が成立するまで続いた。

この戦いで川路は、葦毛の馬に乗り陣頭指揮していた敵将来島を射止めさせ、長州勢を撃退して戦いの流れを薩摩軍優勢に変えた。薩摩の川上助八郎が長州の陣地に突撃し、敵方と斬り合いが始まるうとした時「その勝負譲ってくれ！」と横から川路が躍り出てきた。相手は敵将国司信濃の家来で、剣の達人として有名な長州誠意隊の篠原秀太郎である。彼は見事な太刀捌きで会津、彦根の兵士の死体の山を築いていた。

川路はこの剣客を薬丸自顕流の凄まじい必殺ワザで討ち取った。命拾いした川上の娘が、後の総理大臣、松方正義に嫁いで生まれた女子がライシャワー元米国大使ハル夫人である。

京の都の「蛤ご門の変」では幾度にも及び斬り込みにより、川路の刀は二十余箇所刃こぼれで、鋸のようにささくれ立ってしまった。戦いが終わって川路の大きな戦功に対し、薩摩軍総大将、島津珍彦（久光三男）より新しい刀を下賜され、川路は漸く卒族の身分を超えて、公式に佩刀することが認められることになった。



西郷がこの勇猛果敢な川路の活躍を知るところとなった。論功行賞として、「学問をしたい」という本人の希望に沿って、洋式練兵と太鼓術の研究の名目で江戸に留学する機会が与えられた。

江戸ではそれらを調べる傍ら、北辰一刀流の千葉周作道場で剣を磨き、同時に自ら江戸の社会、市政、民生、奉行所の活動などについて調査し、自分の意見を加えて西郷に報告した。

この報告書により、川路は兵家の他に刑名家即ち法家の素質もあると西郷、大久保等に認められた。後日、警察制度の調査のため一八七一年にフランス留学を命じられ、それが後述する日本の警察制度の確立に繋がることになる。一方、彼の剣術は「警視流」の流儀となって廃れ行く日本剣道を再興させることになった。

一八六八年一月の鳥羽・伏見の戦いでは、伊敷村比志島の卒族七十名よりなる抜刀隊を率い、兵員隊の小隊長として任務である武器運搬に従事していたが、状況を見ては砲煙弾雨のなかを白刃を閃かして臨機応変に攻撃を仕掛け、大きな軍功を立てた。捕虜も四十余名捕え、川路の戦功と指揮官としての優れた素質が薩摩幹部に知られるようになり、兵員奉行に昇進した。

同年五月の上野彰義隊との戦いでは、最大の激戦地となった黒門口の攻略に参加し、さらに七月には白河・浅川の戦いに加わった。

「川路のキンゴロ」なる語がある。

川路の冷静さと丈夫ぶりを称える言い回しだ。白河の戦いの最中、敵弾が川路の急所に命中した。

流れる血潮をもともせず太刀を振りかざし奮闘したが、出血のため意識を失って倒れ野戦病院に担ぎこまれた。診断結果一物の袋（陰囊）の上部を貫通していたがタマはやられていなかった。

戦いのさなか、キンゴロがだらっとぶら下がっていたので、タマには命中しなかったのだ。「さすが川路どんじゃ。なんと肝の太か男か」と川路は一段と名を上げた。男は時として「キンタマが縮み上がった」と表現することがある。

これらのことは女性には分り難いと思われるので一寸説明する。白兵戦でいざ突撃などの生きるか死ぬかのような一大事とき、金玉は緊張して袋が縮こまり少し



上方に吊り上げる。日本海海戦で敵といざ戦闘開始という時、司令官東郷平八郎が部下に言った、

「タマがちゃんたらつとぶら下がっておるか確かめる」。

日本軍では、この言葉は戦場で緊張をほぐす意味ではしばしば発せられている。緊張し過ぎて平常心を失うなどの警句である。

明治維新は独裁政治を行うことなく、勝者が手にした特権を放棄し、自ら武士階級を消滅させ、四民平等の世を築き国と国民の発展向上を目指し、大政奉還（一八六七年、明治元年）、版籍奉還（一八六九年）、四民平等（一八七〇年）、廃藩置県（一八七一年）、徴兵制（一八七三年）、地租改正（一八七三年）、秩禄処分（一八七五年）、廃刀令（一八七六年）等と矢継ぎ早に新政策を実行していった。このような勝者が特権を放棄し、伝統的な公の精神で国民全体の利益を目指したことは世界史上殆ど例がなく、日本武士道と日本人の徳の高さを表している。

しかし、急激な社会変革に伴う反動も大きく、佐賀の乱（一八七四年）神風連の乱・秋月の乱・萩の乱（一八七六年）西南戦争（一八七七年、明治十年）と不平土族の乱が続いた。

維新後武士の身分が廃止され、秩禄処分さらに秩禄公債により収入は半減し、その上、公債による給付金は約七年で打ち切られた。旧藩制の秩禄処分を受け継いだ新政府の秩禄費は財政の四割にも達したので、財政健全化のため土族への支援を中止した。



幕末には、薩摩を除いて全国的には商品経済の発達に伴い、士農工商が商工農士と逆転しつつあった。相次ぐ特権剥奪に土族は生活困難となり、不満を持つ土族が増加し社会不安の状態にあった。

戊辰戦争で鹿児島から函館まで先頭に立って戦った八千三百名の薩摩兵は、官軍の最強兵団であったと胸を張り、論功行賞と待遇改善を期待して帰郷した。

彼等を待っていた現実とは厳しく、やがて行われた藩政改革では城下士を除いて全階級の家禄の上限が大幅に削減された。城下士には従軍期間に応じて四〜八石の軍功禄が与えられ

たが、郷士には支給されなかった。その結果、元々対立していた城下士と郷士との溝がさらに深くなっていった。参考までに述べると、一八二六年当時の薩摩土族の構成比率は約一対十で、城下士一万六千七百九十四名、郷士十六万六千八百三十七名であった。

治安維持のため政府は一八七一年（明治四年）二月、薩摩長州土佐から一万名の

天皇直属の兵である御親兵を東京に、四月に八千名の鎮台兵を全国四箇所に、同年十月市中警護のため三千名の羅卒（警察官）を東京に配備した。

川路は西郷から三千名の羅卒のうち千名は、薩摩から募集するよう命じられた。明治五年、御親兵は廃止され近衛兵に改編された。

近衛兵、羅卒の構成において薩摩土族の占める割合は大きく、羅卒では三分の一を占めている。警官の「おい、こら」なる語は薩摩出身の羅卒によってもたらされ、警官を表現する「マッポ」という言葉は「薩摩っぽ」から生まれたと言われている。

薩摩土族の場合、戊辰戦争後の論功行賞や、お国柄の厳しい身分制度を反映して近衛兵には城下士、羅卒には郷士が採用された。川路は低い身分のため軍隊、近衛軍への道を外された。この厳しい身分制度は、維新の理想と現実との隙間は埋められずに残っていた。

設立間もない頃の近衛兵と羅卒間の争いや西南戦争時の城下士と郷士間の軋轢で代表されるように、一見一枚岩のように見える薩摩の人的纏まりに暗い影を落としている。この身分差のひどさは、西南戦争が始まる直前川路が羅卒に涙声で「諸君は故郷における恨みを今こそ思い出すべきである」と演説していることから想像されよう。

廃藩置県後、鹿児島県は中央政府の命令に背き、税金は政府に納めず、地租改正、秩禄処分、廃刀令、太陽暦への変更も無視して半独立国の状態であった。

征韓論に敗れて下野した西郷を慕って多数の薩摩人が政府、軍隊、警察などを辞職して帰郷した。国家の非常時に役立つ人材の育成を目的として私学校が開設されていたが、西郷の思いとは逆にそこは、反政府の中心的存在となっていた。



この動きを危惧した大久保、川路は二十一名の警察官を帰省させ、鹿児島の情報収集に当たらせた。

西郷の暗殺計画(?)が発覚し、私学校生徒は激昂して蜂起を訴えたが、西郷をはじめとする幹部が抑えた。しかし、急進派が鹿児島市の草牟田や磯にあった政府の火薬庫を襲撃するに至って西郷は腰を上げざるをえなくなり、明治十年二月十五日「政府へ尋問の筋これあり、旧兵隊等随行して上京」するとして、一万三千名の将兵を引き連れて大雪の鹿児島を出発した。

西郷軍の出陣は鹿児島上げての壮挙ではあるが、上土には西郷党の私拳だと傍観する人もかなりいたと言われている。この出陣に対し法治国家を目指す新政府は当然のこととして西郷軍を賊軍として鎮圧することを決定した。

政府軍の将兵には薩摩出身の軍人が少なからずいて、かつての仲間と干戈を交えることになった。この戦いが最後の不平士族の反乱となった**西南戦争**である。

上京に際して西郷は往時と違って作戦に殆ど口を出すことなく、桐野利秋等の指揮に従った。

西郷は政府に対する無謀な戦いの行く末を見通していた可能性が考えられるが、将兵は楽観的で東京見物に行くような気軽さで、在京の知人へ土産を託されてそれを持参する兵士もいたほどであった。

前熊本鎮台司令長官であった桐野元陸軍少将などは、熊本の通過に問題はなく、もし鎮台の妨害があれば青竹一本あれば粉砕できると豪語するほどであった。田原坂で消耗戦になったとき、八代に上陸した政府軍に背後を襲われ薩摩軍は撃退されている。

西南戦争で川路は陸軍少将として三千名の羅卒よりなる別働第三旅団を率いて戦った。官軍は鎮台兵、近衛軍、警察軍よりなり、その合計動員数は五万二千名、死傷者一万六千名であった。このうち警官の動員数は九千五百名、戦死者は六百七十名となっている。西郷軍の総動員は約三万名、死傷者は一万五千名であった。

西郷軍は四千丁の小銃、五十万発の小銃弾、約三十門の砲を用意したが、弾薬装備等の補給が絶対的に不足し、熊本城攻防戦でもたつく間に体制を整え制海権を掌握し、兵站の整った政府軍に一步一步と敗退していった。

十七日間に及んだ田原坂の戦いでは、政府軍は一日平均三十二万発の小銃弾と千発の砲弾を消費した。戦傷者は両軍で三千名以上に達した。

因みに、全期間を通じて政府軍が消費した弾丸の総数は、小銃弾三千四百万発、砲弾七万四千四万発である。総戦費は官軍四千二百万円、西郷軍六十万円といわれている。西郷軍は約七分の一の小銃弾と戦費で官軍と戦ったことになる。官軍の戦費は当時の国家歳入五千二百万円の約八割に達している。

西南戦争は、かつてのガタルカナル戦やインパール戦における日、米英との物量の差を彷彿させられる。

田原坂で薩摩軍が「赤帽(近衛兵)と銀筋(羅卒)がいなけりや、花のお江戸に踊り込む」のにと官軍に手古すっていた。父兄や先輩達が一進一退の激戦の最中、鹿児島城下では子供達は次の歌を無邪気に歌っていたと言われている。

「大久保、川路は鯛か雑魚か鯛(隊)に逐(お)われて遁(に)けて行く
大久保、川路の首さへ取れば 可愛い鎮台は殺しやせぬ
大久保、川路を油で揚げて 薩摩西郷どんのお茶塩気」

西郷軍はその後も負け戦で退却し続けたが、弾薬の不足は目を覆うばかりで、鍋釜寺の鐘を鑄潰し、やっと二千発/日の弾丸を製造した。しかし、粗製のため真っ直ぐ飛ばず、飛距離もせいせい一〜三町程度しかなかった。最後は小石まで弾丸の代用として使用した。弾薬不足のため西郷軍は抜刀隊による斬り込みで対処せざるを得なかった。

百姓を中心として徴兵された鎮台兵は、西郷軍抜刀隊の斬り込みで度々潰走した。これに対処するため政府軍は、元会津士族などを中心とする警視庁巡查百人よりなる抜刀隊を編成し、西郷軍に対抗した。なぜ元会津藩士が多いかといえば、会津戦争の仇を晴らすため、警視庁抜刀隊に参加したからである。この時の戦闘を詠った有名な「抜刀隊」の歌は日本最初の軍歌である。



「吾は官軍我が敵は 天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たる者は 古今無双の英雄で
これに従う兵士(つわもの)は
ともに剽悍(ひょうかん) 決死の士
鬼神に恥ぬ勇あるも 天の許さぬ叛逆を
起せし者は昔より 栄えし例(ためし) あらざるぞ
敵の亡ぶる夫迄(それまで)は 進めや進め諸共に
玉ちる剣(つるぎ) 抜き連れて 死ぬる覚悟で進むべし」

行進曲「抜刀隊」は、旧軍は言うまでもなく、現在でも陸上自衛隊、日本警察で公式の分列行進曲として演奏されている。

なお、「田原坂」の歌に美少年が登場する。

「雨は降る降る人馬は濡れる 越すに越されぬ田原坂
右手に血刀左手に手綱 馬上豊かな美少年」

に少年が登場する。この美少年は、西郷、大久保を継ぐべく薩摩の逸材と惜しまれた村田新八の長男、岩熊がモデルではないかといわれている。

この役で新八は鹿児島市の岩崎谷で、岩熊は熊本県植木で戦死している。さらに「田原坂」の歌詞の「左手に手綱」は、元々は「左手に生首」であったが、余りにも生々しいとして「左手に手綱」に替えられたといわれている。

上述した西南戦争には旧会津藩士が参加している。それは西郷の官職辞任に伴って警視局の巡查まで多数退職してしまったので、川路が東京を守る巡查を旧会津藩から募集しところ「鬼官兵衛」として武名を馳せていた元会津藩家老佐川官兵衛が旧会津藩士三百八人を連れて警察軍に加わった。

西南戦争が始まると、彼等は薩摩に対する戊辰戦争の雪辱を晴らすために川路の下で参戦した佐川は「鬼官兵衛」の名に恥じず勇猛果敢に戦ったが、阿蘇郡長陽村で銃弾を受けて戦死した。

元会津藩家老、山川浩も陸軍少佐として参戦した。彼は次の和歌を詠んで出陣し



ている。

「薩摩人 みよや東(あずま)の大丈夫(ますらお)が
さげはく太刀は利(と)きか鈍(にぶ)きか」

山川の妹は、明治四年、岩倉遣欧米使節団の五人の女子留学生の一人である山川捨松である。彼女は十二才で渡米し、約十年間彼の地に留学したが、帰国翌年、陸軍卿大山巖と結婚し、後に鹿鳴館の女王と呼ばれた。結婚に際しては、山川浩は「会津の不倶戴天の敵薩摩人と結婚するとはなにごとか、絶対許さない」と怒り、揉めにもめた。結婚できたのは根気よく説得した西郷従道のお陰といわれている。

薩摩藩時代は顕在化していなかったが、前述した身分格差は薩摩藩の泣き所で、西郷軍の戦況が不利になった後半戦では城下土と郷土間の不和が顕在化してきた。

薩摩最強の軍団と言われていた約六百名からなる出水の郷土団ですら六月中旬には政府軍に投降したように、郷土隊の中には前途に見切りをつけて戦線を離脱するものが続出した。

八月中旬、延岡で西郷が「諸隊ともに進退は勝手にせられよ」と各隊幹部に言い渡したせいもあるが、この時一万人が政府軍に投降した。

最終戦闘となった九月二十四日の城山での西郷軍の軍勢は僅か三百余名で、その大部分は城下土で構成されていた。

この西南戦争は、九ヶ月間、政府と薩摩の間で戦われた戦争であったが、薩摩が敗北することにより以後不平士族の乱は収まった。

乃木大將が明治天皇の大葬の夜自刃した原因の一つが、西南戦争で歩兵十四連隊の連隊旗を奪われたことといわれている。その連隊旗手河原林雄大少尉を斬ったのは、西郷軍伊東隊分隊長の岩切正九郎で西南の役後吉野村の村長を務めた。

城山における西郷の自刃の報に接し、敵味方と立場は違え、共に維新を成し遂げ肝胆相照らしたあった、今はなき英雄を偲んで勝海舟は、後日万感迫る思いを歌に託している。

「ぬれぎぬを干そうともせず 子供らが なすままにて 果てし君かな」

話は遡るが、明治四年、司法省は司法制度の調査のため八名をフランスを含む欧州に派遣した。その中に帝都を守る警察制度の創設を目的として川路が含まれてい

た。国民保護のために自主独立の気風が色濃く残っていたフランスの制度を参考に出来たことは日本にとって幸運であった。

前述した「チンプン事件」はこのときの出来事で、便意を催したが便所が込んでいたのであろう、列車の中でやむを得ずひざ掛けで隠しながら新聞紙に出し、丸めて窓から投げ捨て知らぬ顔を決め込んでいた。

しかし保線夫に当たった「ホカホカ団子」の包紙は日本の新聞紙であることが分り、翌日地元の新聞で書き立てられ騒ぎになったのだ。

川路のパリ滞在は七ヶ月で、この間警視庁、監獄、兵舎などを訪問し、組織、仕事の分野、運営、給料の仕組みなどを鋭意調査した。後日、お雇い外人として来日することになるパリ大学教授のポアソナードなど法律学者の講義も聴講した。

国家の根幹は法律であり、警察制度は重要な執行機関の一つであること、さらに三権分立が近代国家の骨格であり、それが西欧諸国の強さの秘訣であることが次第に分ってきた。パリのポリスは尊大さがなく親切である、これは日本も見習わなければならないとの強い印象を受けた。

それまで日本の警察は鎮台の軍隊の下に置かれており、また司法警察（司法権）と行政警察（行政権）が分離されていなかった。

それらの問題解決のため、一八七一年、帰国報告書で内務省の設置の必要性を建議した。司法省に提出した「警察制度についての建議」は、日本の近代警察の原点になったのである。同年内務省が設置され、大久保利通が内務卿に、川路が警視庁の大警視に任命された。警察権は内務省の、さらに司法権は司法省の管轄下に分離されることになった。

川路は西郷に認められてエリートコースを駆け上ってきた。ヨーロッパで警察制度を研究したとき、整った法制度と官僚制度で国民を統治している彼等のやり方を見て日本も見習うべきであるとし、同じ考えの大久保利通に共感を持つようになった。

彼は寝食を忘れて亡くなるまで、睡眠時間は一日四時間という仕事一筋の生活を続け、近代的警察制度の確立に邁進した。

大久保同様清廉潔白で蓄財もなかった。信賞必罰で厳しく規律を維持し、絶えず

現場を見回り、部下と同じ厳しい環境下で激務に耐えた。事故犠牲者のもとには必ず駆けつけた。

川路は非常に格調の高い「警察手眼」という口述録を作った。これは加来耕三によれば『警察論語』とも、バイブルとも呼ばれ、警察官のみならず全公務員に当てはまるように述べられている。今日から振り返れば、日本型経営の原点ともいえる。

武士道精神も多分に盛りこまれており、いま、問われている日本人のアイデンティティーについても余すところなく語りつくされている。働くとはそもそも、いかなることなのか？現代の社会人が等しく見失ってしまったものがこの全文の中にある。警察官は「声無きに聴き、形無きに視る」（相手がいない処でも常にその声を聞き、相手の姿がないところでもその姿見るかのようにする）の態度で「国民の楯となつて死ぬ」という川路の叱咤激励の言葉でもある』

一八七八年三月、北海道開拓使長官黒田清隆夫人が亡くなった。世間では酒乱した清隆が夫人を斬殺したという噂が広がった。政府も真相究明の調査を迫られた。

川路は検死官を伴って黒田夫人の墓の棺を開いて、他殺の形跡なしと断定し棺の蓋を閉じた。これに対し同年五月、大久保が紀尾井坂で暗殺されたとき、刺客たちは斬姦状に大久保等の罪状のほか、川路の名をあげて「法律ヲ私スル」として仲間を庇い事件をもみ消したと非難した。

川路は故郷に戻るまでに没後百二十年の長い月日を要した。同じく地元で人気のない大久保利通は百年を要した。二人とも鹿児島では「故郷に刀を向けた男」「西郷の恩を仇で返した男」として長年受け入れられなかった。

しかし、明治政府の成立間もない極めて不安定なあの時期に、現実を見極め前向きで西南戦争に対処し、牙を砥いで虎視眈々と植民地化を狙っていた西欧諸国につけ込まれた可能性が大きい。この点から考えると、二人の近代国家建設への功績は計り知れないものがあり、薩摩の誇る第一級の人物といえる。

《調所広郷と浜崎太平次の活躍》

この項では破綻状態の財政を再建し、薩摩藩が明治維新で活躍できる基盤を確立した調所広郷、浜崎太平次とそれを支えた奄美諸島の血の滲むような犠牲と貢献について述べる。

江戸末期になると、米に立脚した農本主義が商品経済、貨幣経済の発展に対応できなくなり、幕府、諸藩共に極度の財政難に陥った。調所は財政改革に取り組み、浜崎は彼を支援した。

特に明治維新の前哨戦たる幕末天保期の改革の成果が、その後の幕府と雄藩の明暗を分けることになった。幕府は天保の改革で幕府の権威回復に務めたが、成果なく失敗に終り、幕府は足早に崩壊の道を辿ることになった。

一方、薩摩、長州等は血の出るような激しい改革を実施し、借金で身動きの出来ない状態から財政的に体力を回復し、新しい国造りに邁進することが出来た。薩摩では調所広郷、長州では村田清風が財政を立て直した。

一 調所 広郷 一

調所広郷は、薩摩藩の年収が十三〜十四万両しかないのに、五百万両の借金を抱え、年間の利子だけでも六十万両という破綻した財政再建に、全身に泥をかぶりながら己を捨てて取り組んだ。経済は全くの素人であるにも拘わらず、三十年間に亘る大手術の末、財政立て直し、重豪からの命令であった五十万両の積立金を含む二百五十万両の余財を蓄えた。

幕府に密貿易を追及され、藩主と藩に責任が及ばないように責めを一身に負い、

一八四八年、黙秘のうちに毒を呷って自殺している。

辞世の句に曰く、

「何事も 嘘偽りの 世の中を

見て捨て難き薩摩魂」

山ほどある間は、調所の命と共にあの世に持って行っている。武士として実に見上げた男だ。

財政再建のため冷酷な処置も取らざるを得なかったため、日の当る場で活動した明治の元勳たちに比べると、人々の抱いている印象は決して良くはないが、新国家建設に貢献し、薩摩が誇る第一級の人物であることは間違いない。

調所と彼を支えた浜崎等の藩財政立て直しと、その後の小松帯刀や大久保利通等による匱乏造りによる軍資金の確保がなければ、日本の国造りにおける斉彬公、西郷、大久保、小松等の活躍はなかったといっても過言ではない。

しかしながら調所は、財政を立て直した偉業にも拘らず、後継者選びで久光派の中心人物の一人であったことから、多くの薩摩系元勳達に佞臣と見做され、時折彼の功績に対して贈位の話が出ても彼等の横槍で潰された。遺児は家禄を下げられ、鹿児島では冷たい扱いを受けて一家離散の憂き目をみている。

西南戦争後、僅かながら再評価の機運が高まり、彼の功績の編纂が行われたが、記録のかなりの部分が反調所派によって焼却されていたことが判明した。平成十年によくやく天保山公園に調所の銅像が建立された。しかし、現在でも彼の汚名は残っており、彼の偉業は正当に評価されていない。

調所広郷の生き様を振り返ってみよう。彼は安永五年（一七七六年）に生まれ、嘉永元年（一八四八年）没している。享年七十三才。

武士の下層である小姓組に属する城下士の息子として生まれ、十二才で調所家の養子となり茶坊主として出仕し、二十二才で出府した江戸で二十五代藩主島津重豪に才能を見出され登用される。

重豪は三十三年に亘り藩を治め、英君と呼ばれるに相応しい藩主であった。英邁な気質で進取の精神に富み、学問好きの彼は造士館、演武館を創設し、医学院、薬園を充実させた。中国語辞典を編纂し、蘭学に懲った。また、大名や将軍家と婚姻関係を結び、藩の地位向上を図り、彼の娘、茂姫を十一代将軍家斉に嫁がせている。そのため派手な性質とも相まって、藩の実力以上の出費を重ね、五百万両という借金地獄に藩を陥れてしまった。

彼は隠退して長男の斉宣に藩主の座を譲った。新藩主は人事を一新し、財政再建に取り掛かるが、それは重豪のやり方をほぼ全面的に否定した方策であったため、隠退した筈の重豪は激怒し、新首脳部の十三人を切腹に追い込み、斉宣を退位させて孫の斉興を藩主に据えた。この事件が世にいう「近思録崩れ」である。



調所広郷の像
(場所: 鹿児島県)

調所は齊興の下で町奉行、小林、鹿屋、佐多および志布志の地頭を務めている。重豪は再び藩政に介入し、文化十年（一八一四年）大阪で徳政令を発して、百二十万両の借財の破棄を宣言したが、上方銀主達の反発を買い、その後薩摩藩に貸し出す銀主がいなくなり藩財政は大困難に陥った。

文政七年（一八二四年）調所は重豪の側用人格に就任して唐物貿易に従事し、幕府から許可を受けていない商品の密貿易（抜け荷）にも手を染めるが、膨大な額の借金を前にしては焼け石に水の状態であった。

この頃の藩の収支を見てみよう。年収は十三万両程度しかないのに、支出は十九万八千両であった。支出の内訳は、参勤交代費用（五万両）を含む江戸藩邸の維持費が十万両で五割、借金の利子払いが八万両で四割を占め、家臣の俸給もままならず、支払いは大幅に遅れることが多かった。

幕末には多くの、というよりも殆どの藩は借金で首が回らず、参勤交代の費用を用意するのですら一苦労であった。江戸への途中で資金不足で立ち往生する藩も見られた。薩摩藩も大阪まで来たはよいが、費用不足に陥り前に進むことができず、大阪藩邸の藩士が必死に駆けずり回って金を集め、江戸に向うことが出来たこともあった。

信州路の旅籠には「人の悪いのは鍋島、薩摩 日暮れ六ツ泊まり七ツ立ち」（午後六時に泊まり、翌朝午前四時に出発）と両藩のシブチン振りをからかった戯れ歌が残っていたそうである。

文政十年（一八二七年）銀主たちとの借り入れ交渉に失敗し、重豪は事態を打開できる人材を物色した結果、調所に白羽の矢を立て調所に財政再建を命じたが、彼は経済は素人であるからと断った。重豪は逆らえば叩き斬らんとするような強い態度で刀をちらつかせて五十六才の調所を命に服させた。

前任者から上方の銀主達との交渉を引き継いだ調所が話合おうとしても、彼等は全く相手にしてくれなかった。やがて出雲屋孫兵衛という商人が調所の清廉潔白で実直な人柄を見込んで



協力してくれることになり、新たな銀主を集めることが出来た。この出雲屋は、財政再建のコンサルタントの役目を果たして、多大の貢献をしたので、藩は彼に「浜村」という苗字と帯刀を許した。

天保元年（一八三〇年）調所は重豪から次の三ヶ条の命令を書いた朱印状を渡された。この目的達成のために独裁的権限と家老格の地位を与えられた。

・ 天保二年から十年間に五十万両の積立金をつくること

・ そのほかに平時並びに非常時の手当てを蓄えること

・ 古い借金の証文を取り返すこと

重豪は八十九才でこの世を去ったが、財政再建策は齊興に引き続かれ、調所は正式に家老職に就任した。

天保六年（一八三五年）調所は五百万両の債権の整理に着手した。二百人以上の債権者を集めて「五百万両を二百五十年割賦、無利子償還、返済は元金のみ」と言い、銀主から集めた証文を彼等の目の前で焼却して「文句があるなら、この刀でこの体を好きなように斬ってもよい」と啖呵を切った。債権者である銀主達はこの「踏み倒し」に激怒し「他の大名が同じ事をしたら大変なことになる」と幕府に訴えた。

予め幕府に手を回し十万両の袖の下を渡しており、さらに將軍の正妻が重豪の娘ということもあって、薩摩藩と調所に司直の手は伸びることはなかった。浜村孫兵衛は逮捕され「大阪追放」処分を受けた。地元薩摩の債権者達にも「踏み倒し」の措置を取ったが、彼等を武士の身分に取り立てて、調所の手足として使い不満を押さえ込んでいた。

薩摩藩は「踏み倒し」同然の処置を取ったが、返済状況を見てみると、廃藩置県の翌年明治五年（一八七二年）まで三十五年間は律儀に返済している。債権者には密貿易品を取り扱わせ利益を上げさせている。

調所は米を中心とする農本主義封建体制から商品経済に移行しつつある時流を読み取り、藩に商社機能を持たせ、国内貿易では米、タバコ、菜種、胡麻、椎茸、ウコン、薬種、黒砂糖の品質を高め、収益の増加を図っている。農産物のみならず黄、薩摩焼、織物、鯉節も販売商品としている。

一方、琉球貿易では、主として昆布、鮑、なまこなどの乾物を輸出して、塗り物の朱色の原料となる「光明朱」などを輸入して利益を得ていた。しかし、天保十年（一八二七年）幕府の貿易と競合するという理由で、幕府は薩摩船の長崎廻漕を禁止したので琉球貿易は行き詰まってしまった。

彼は財政再建のため、贋金造りにも手を出したと言われているが、それは彼の死後開始されたものであり、反調所派が「死人には口なし」を利用して彼に責任を負わせているに過ぎない。

贋金について一言。薩摩藩の贋金造りは、琉球貿易の行き詰まりに伴う藩財政破綻の回避、植民地にならないための富国強兵と殖産興業、維新の軍資金の確保のためであった。それは文久三年（一八六三年）から小松、大久保たちが中心となり藩をあげて取り組んだ貨幣の密造である。密造に従事した職工は、最盛時四千人に達したといわれている。

藩の贋金造りの正確な数字は、ことの性質上、証拠を隠滅しているので正確な数字は不明である。幕府から正式に百万両分の銅硬貨「琉球通宝」の製造を許可されていたが、藩は「琉球通宝」の他に密かに「天保通宝」を鑄造し、その額は二百九十万両に達した。

このほか贋の「二分金」を百五十万両密造した。それらを合計すると四百四十万両になる。これは仮に一面を現在価格で五万円とすると、二千二百億円に相当する。

許可された「琉球通宝」の生産高を額面通りの百万両と仮定すると、贋金の鑄造高は三百四十万両となる。これは薩摩藩の年間財政の二十五年分以上に相当する額であるが、実際にはこれをかなり上回る金額を製造していると思われる。

幕末には幕府、諸藩を問わず、ほぼ財政破綻の状態にあり、佐幕藩、倒幕藩を問わず贋金造りを行っている。

「天保通宝」は盛岡、秋田（久保田）、仙台、会津、水戸、安芸、土佐、長州、福岡、久留米、薩摩の諸藩で密造されている。その数は合計二億枚、そのうち三分の二は薩摩藩によると推定されている。

幕府による鑄造高は四億八千五百万枚なので、約四十％は贋硬貨ということになる。一方、贋「二分金」も秋田（久保田）、仙台、会津、二本松、加賀、安芸、名

古屋、土佐、宇和島、筑前、久留米、砂土原、薩摩の諸藩で密造されている。

新政府は明治二年（一八六九年）に贋「二分金」の密造売買禁止令を発令した。この頃大阪、京都で流通していた「二分金」十枚のうち七、八枚は贋物で、種類も十八種あったといわれている。



調所広郷を語るとき避けられないのが二十七代藩主、斉興の後継者選びの際の「お由羅騒動」である。当時薩摩は、斉彬を推す派と久光を推す派に分かれて争った。斉彬派は西郷、大久保など精忠組が属する

下級武士に強く支持され、一方久光派は調所広郷、島津将曹、島津豊後ら藩重役たちも久光擁立を強く支持していた。斉興と妾のお由羅は世子である斉彬よりも妾腹である久光を望んだ。斉彬は聡明であるが重豪に似て西洋かぶれと見做され、折角二百五十万両蓄積した財政が再び悪化することを恐れたのである。

調所と斉彬は互に敵対視した。その主な原因の一つには、調所の関心は薩摩藩にあるが、斉彬は日本という国家の将来と植民地化を進める欧米諸国のアジア進出の阻止まで考え、それに対抗するには殖産興業と富国強兵で、外国勢を撃破出来る国力をつける構想を持っていたからである。

斉彬の構想は、血を吐く思いで財政再建に取り組んできた調所にとって、重豪の浪費の悪夢の再来としか写らなかつたであろう。

お由羅騒動では久光派の筆頭家老、島津将曹を暗殺しようとした計画が漏れ、切腹十四人、遠島九人、そのほか五十余人に及ぶ厳しい処分が行われた。

西郷は赤山鞆負が切腹した時の血の滲んだ肌着を形見として受け取った。大久保の父は島流しにされた。

斉彬の英明さと高い見識は、幕府や心ある大名に知られており、彼等は斉彬が藩主の座を譲り受け、中央で活躍することを望んでいた。斉彬は幕府者中阿部正弘と結託して、薩摩藩の密貿易を探求すると誓って斉興と調所の降板を図った。

幕府は調所を内密に江戸城に呼び出し、斉彬から得た密貿易の情報をつき付け斉興の隠居を促したと推定されている。

調所は密貿易の責任を一身に被って自裁した。斉興は、調所は斉彬と阿部の企みで詰め腹を切らされたと思い込み、頑なに引退に反対したが、ついに幕閣が乗り出し、将軍家慶が斉興に隠居を暗示する茶器を下賜した。斉興は五十九才であったが隠居を決心し、斉彬は四十三才で二十八代の薩摩藩主の座に就くことができた。

かくして一件落着したが、西郷、大久保を中心とする精忠組の面々が明治維新の立役者となり、その後も彼等が久光に面と向っては反対できないことも加わって憎悪の念が増幅され、調所家は徹底的に迫害を受けることになった。それにも拘らず調所の果たした大きな功績は、維新史上燦然と輝き続けることであろう。

— 浜崎 太平次 —



平成九年、指宿の浜崎太平次公園に右手に扇子を左手には分度器を持った八代目浜崎太平次の銅像が建立された。彼は並外れた商才と度胸を武器として、薩摩藩の御用商人となって調所を助け、破綻した薩摩藩財政の再建に貢献した九州一の大商人である。

文化十一年（一八一四年）に指宿市に生まれ「やまき」の屋号で大活躍し、一八六三年五十才の時、大阪で死去している。彼は、物事を鳥瞰的に把握できる広い視野と度胸をもって、幕末動乱時商業を通じて薩摩のみならず日本の社会の改革に貢献した薩摩の誇る偉大な男である。

浜崎家は代々廻船商を営んでいたが、八代目の太平次の代には落ちぶれて昔日の面影は失せていた。彼は十四才で、板子一枚めくれれば荒海へ放り出されるしかない海の男の世界に飛び込んで琉球に渡った。当時の日本船は「たらい船」と同じで、幕府の規制により船体構造が極めて脆く、遭難と隣り合わせであった。

ここで当時の船について一言。徳川幕府が覇権を握ると幕藩体制維持のため五百石以上の大型船を淡路島に集め焼き払ってしまった。天保四年（一六三三年）には千五百石（約二百トン）以上の大型船建造禁止令を発令し、同時に竜骨と甲板の設

置を禁止し、外洋の航海には極めて脆い竜骨と甲板のない昔の和船の構造に戻ってしまった。さらに帆柱は一本、帆は一枚に制限したので、沿岸航海用の小型船しか造れなくなってしまった。

和船は竜骨が無いため船体構造が脆弱になり、さらに甲板がないため嵐に遭遇すると、雨水及び浸入する波浪により浸水して海難事故、漂流事故が絶えなかった。

江戸時代、いや明治時代初期でも廻船は日本海側が主な航路であった。太平洋航路は天候が荒れると遠州灘等で遭難する事が多かった。一六三五年には海外渡航並びに帰国を全面的に禁止してしまった。因みに、慶長九年（寛永十二年）一六〇四年（一六三五年）の三十二年間に、三百五十六隻の朱印船が東南アジア各地を訪れ広範囲に交易をしていた。朱印船は二百〜二百五十人が乗船する五百〜七百五十トンの大型船で、中国のジャンク船、西洋のガレオン船の長所を取り入れて竜骨と甲板を備えていた。山田長政がタイで活躍していた頃、アユタヤだけで四千人の日本人の滞りが記録されている。

日本人と華僑の海外進出がほぼ同じ時期に始まったことを考えると、一六三五年に幕府が海外渡航並びに帰国を全面的に禁止しなかったならば、その後、東南アジアはおろか、カリフォルニアやメキシコあたりでも標準日本語のみならず「議をいふな」、「てげてげ」、「ちんがらっ」等の薩摩語が飛び交わされていたかも知れない。

浜崎太平次は斉興、彬育、忠義の三代の殿様に仕えた。幕府の手が彼に迫った時は斉彬自ら彼を護り、また彼（浜崎）が亡くなった時、久光に「右腕を失った」と言わしめたほど信頼が厚く、薩摩に貢献した。病重く病床に伏している時、孝明天皇は侍医を彼のもとに派遣している。近衛家を通じて、朝廷にかなりの献金をしていたのであろう。

彼は密貿易を含む貿易、海運、造船を主な生業とし、藩の御用商人として斉興、彬育、忠義の三代の殿様に仕えた。毎年三十万両に及び多大の資金を藩にもたらした。膨大な額の資金を藩に献納し続け、薩摩藩が明治維新で活動する財源を支えた。唐物、黒砂糖、北海道の昆布が主な商いであった。

彼の全盛期である斉彬時代には三十四隻の大型船を所有し、指宿、長崎、下関、大阪、新潟、函館、奄美大島、琉球等の国内は言うまでもなく、清のアモイ、ジャ

ワ、フランス、キューバ等とも幅広く交易を行った。

奄美諸島では黒砂糖の回送業者に指名され、さらに薩摩藩と一緒に幕府に内緒で甘口醤油を製造してフランスに輸出している。このとき使われた輸出入用の白磁、青磁、赤絵の三種類の醤油瓶が尚古集成館に収蔵されている。また彼は、薩摩藩と合併して都城でテングサから寒天を作り、中国とロシアに輸出している。

浜崎は、米国の南北戦争のあおりを受けて国際的に綿花不足に陥った時、綿花交易に手を広げて約十万両の利益を得ている。

さらに南北戦争終結後、余剰になった銃器を輸入し、薩摩や長州の新しい兵器の調達に貢献し、余った旧式の武器は幕府や諸藩に売りつけて膨大な収益をあげ、薩摩藩が明治維新で活躍できる資金の蓄積に貢献した。浜崎は紀州の「紀伊国屋文左衛門」



加賀の「銭屋五兵衛」と共に「実業界の三傑」と言われている。

浜崎は当時「抜け荷」と称された密貿易で何度も危ない橋を渡っている。調所の下で加賀の銭屋五兵衛と北前船と唐物取引で密貿易を行っていたが、浜崎の船が座礁し、密貿易が暴露されそうになったことがある。

浜崎、調所、銭屋、幕府の見事な連携プレーでもみ消している。薩長同盟以前攘夷が叫ばれていた幕末、綿花貿易を自論む浜崎の船は、長州側から見ると国益を損なう国賊行為として関門海峡で薩摩の船を狙い撃ちし、浜崎の船長が攘夷の志士達に惨殺された。当時薩摩では、関門海峡を「三途の川」と呼んでいたほど危険に満ちていた。

調所、浜崎等による薩摩藩の財政改革に最も貢献した品は黒砂糖である。天保年間（一八三〇年～一八四三年）における薩摩藩の黒砂糖による収益は、約二百四十万両と見積もられている。

これは江戸時代初期薩摩藩の支配下に置かれた奄美三島（奄美大島、徳之島、沖永良部島）の特産品である。

その生産は元禄時代から始まっているが、薩摩藩は十八世紀中頃から高い商品価値に目を付け、砂糖さび優先の作付けを強制し、情け容赦ない徹底的な生産管理体制

制を敷いている。このため奄美の人たちは極めて厳しい収奪体制の下で過酷な生活を送らなければならなかった。

砂糖さび植え付けのため米作は禁じられ、住民の主食は薩摩芋となった。以前は土地を三分割し、三分の一つ畑を休ませて地力の回復を図った「三圃農業」を行っていたが、増産のためこの方式が取れなくなった。

平坦地や緩傾斜地は砂糖さびが植えられ、主食の芋は山を開いて植えざるを得なくなったが収穫が悪く、しばしば凶作や疫病に見舞われるようになった。

宝暦五年（一七五五年）の凶作のときは、徳之島の島民が三千人も餓死している。これは「宝暦の大飢饉」といわれている。

大正時代以降になって「宝暦の治水工事」の犠牲者は「薩摩義士」として顕彰されているが「宝暦の大飢饉」の犠牲者は殆ど世に知られていない。

奄美の黒砂糖は、一八〇〇年以降、薩摩藩の収益の大半を占め、さらにこれは明治維新で薩摩藩が活躍する新しい国造りの際の資金源であった。

これは奄美の人々の犠牲の上に得られたものであり、薩摩人のみならず日本人全体が江戸時代に生きた奄美の人たちに深く感謝の気持ちを忘れてはならない。

八期通信アーカイブス

2006年 第12号
養毛 恵子（5組）



私が、主人の故郷、内之浦に帰って来まして、早、三十五年も経ってしまいました。昔は陸の孤島などと云われていたようですが、ロケット基地が出来、国見トンネルの開通で、町外へ短時間で出られるようになりました。

そんな小さな町ですから刺激や楽しい事の少ない、海と山に囲まれたのんびりとした生活を送っています。子供達が小さい頃は、学校の事、婦人会の事と飛びまわっておりましたが、義母を介護し、伯父を看取って、すっかり自分の体調を崩し、最近では好きな花木の手入れもままならなくなりました。

ある病院の先生が“がんばらない、あきらめない、生きるってすばらしい”と云っておられるのを聞き、そうだ、何も出来ないとかあきらめずに、出来る事を見つけて何かをする事が生きてるあかしになると思い直しました。

お陰様で、我が家の庭は一年中花が咲き、和ましてくれまして。

花作りが好きですが、これも健康でなければ中途半端になり、花達が可哀想です。今ではもっぱら、宿根草や球根のように毎年花を咲かせてくれるものに切り替えました。

体調を崩してからは、主人も子供達も気を使ってくれますので、私はすっかりその気になり、体調と話し合いながらの自由な生活を送っております。